

# 2012 岐路の 国会

## 外交ジャーナリスト

### 手嶋氏が見た集中審議

わり、一方の中曽根氏は、再軍備を求めて自主憲法の制定を主張して政治家となった。この2人の理念は、政治家としての出発からすでに対極に位置していた。

思う。超大国と安全保障同盟を結んだ国は、外交や安全保障という最重要の課題を同盟相手に安易に委ねてしまいがちだと考えていたのだ。

その結果、外交・安保

議論が少しも聞かれな

# 危機目前に緊張感欠く

だが、「安全保障同盟には抗いがたい毒が含まれている」という認識は分ち合っていたように

に限らず、災害時の危機管理といった「大きな政治」を自ら担おうという人材が政治家を指さな

い。米国がかさず安全保障の傘の下に日本は隠れていけばよいという態度を続けてきたからだろ

を接する韓国での核安全保障サミットに飛ぶ直前の国会である。にもかかわらず、日本として何を



手嶋龍一（てしま・りゅういち）49年芦別市生まれ。慶大経済学部卒。NHK入局後、ボン支局長、ワシントン支局長などを経て05年独立。07年から慶大教授。近著に「ブラック・スワン降臨」。

示さなかった。危機を目前に何という緊張感を欠いた発言だろう。この首相答弁は、今の日本の「惨状」を何よりもよく表している。

「国権の最高機関」である国会で真摯な外交・安全保障論議が聞かれたのは、中曽根康弘内閣から宮沢喜一内閣にいたる時代が最後だった。この世代を継ぐ政治家から傾聴に値する論議が途絶えて久しい。それは必然だったのかもしれない。

戦後日本の出発にあたって、宮沢氏は「軽武装・経済重視」の吉田ドクトリンの策定に深くかか

26日の参院予算委員会で、野田佳彦首相は北朝鮮の長距離弾道ミサイル発射予告について尋ねられ「（北朝鮮に）強く自制を求めろ」「国際社会と問題意識を共有し、一緒に働きかけるよう試みる」と述べるにとどめた。

38度線で北朝鮮と国境